

こどもの居場所実態調査の結果に関する評価及び分析

1 子ども票について

(1) 居場所「あり」が8割以上

子ども全体（小学校4～6年生〔※以下、小学生〕、中学生、高校生）で、平日放課後〔※以下、平日〕及び休日ともに家で過ごしているのは18.7%で、81.3%の者には平日又は休日に家以外に過ごす場所がある。年代別の内訳をみると、「平日・休日ともに家で過ごす」割合は、小学生23.4%、中学生12.5%、高校生19.4%と、差がみられた。最も低い中学生の場合、「家以外で過ごす場所」としては「部活動」が最も多く、平日では55.5%、休日では38.5%を占めている。同じ延べ数で比較した場合、小学生の「部活動」の割合は平日7.2%、休日2.6%にとどまっている。（意味合いとして中学生の「部活動」に近い小学生の「スポーツ少年団」を加えても平日15.8%、休日10.3%である）

子ども全体について、過ごす場所が「家」か「家以外」か、で比較したところ、平日は「家」31.9%：「家以外」68.1%、休日は「家」32.2%：「家以外」67.8%で、平日・休日の差はほとんどなかった。

また、「過ごしている場所が安心できるかどうか」については、調査実施前には、その場所で「過ごしている」と「そこが安心できる」ことは必ずしも一致しないのではないかと（すなわち、「安心できない」の回答が一定割合いるのではないかと）、との仮説を考えていたが、「非常に安心できる」又は「どちらかと言えば安心できる」の回答が、平日・休日ともに97.5%に上り、「過ごしている場所」と「安心できる場所」は、ほぼ同義となった。

加えて、「各場所に行くことになったきっかけ」については、各年代で、平日・休日ともに「誰かに誘われたわけではなく、自分で行くことを決めた」が最も多く（平日43.7%、休日36.3%）、それぞれの過ごす場所には、自分の意思で行っている子どもが多数派であった。

全体的には、5人中4人以上は、家・学校以外に自分の「居場所」があり、具体的には、「過ごしている場所」として上位に挙げた、部活動、習い事、児童クラブ、スポーツ少年団といった既存の取組・施設等が、安心できる「こどもの居場所」としての機能を果たしていると評価できる。

(2) 「居場所の数」は、1～2カ所程度

家・学校以外で過ごす場所がある子どもに対し、最大5カ所を上限として回答を求めたところ、子ども全体では一人当たり、平日で1.7カ所、休日で1.9カ所だった。年代別にみると、小学生が最も多く、平日で2.0カ所、休日で2.2カ所。中・高校生は同数で、それぞれ平日で1.6カ所、休日で1.7カ所だった。

「家以外で過ごす」割合は、小学生が最も低いと、小学生が最も多いが、「家以外で過ごす場所」の数としては最も多くなっている。これは、平日の上位が、習い事33.8%、児童クラブ9.1%、祖父母の家8.9%で、休日が、習い事18.5%、祖父母の家13.2%、ショッピングモール13.0%と、比較的分散する傾向であったためである。一方、中・高校生が過ごす場所としては、「部活動」がそれぞれ最も多く、平日で50%以上、休日でも30%以上だった。また、過ごす場所の数でみると、平日の中学生の56.8%、高校生の60.3%が1カ所であり、休日でも1カ所が半数以上である傾向は同様であることから、中・高校生については、いわば「特定の居場所に集中している」現状である。

なお、小学生についても、中・高校生ほど1カ所に集中していないものの、1カ所又は2カ所の割合は、平日で73.8%、休日で66.4%であり、2カ所以下が多数派である。

全体的には「多くの者が家以外の自分の居場所を持っているものの、その数は複数とは限らない」と言える。例えば、ある子どもが、今は唯一の居場所である「部活動」に通っているが、ある日突然部活動を辞めてしまったとたん、居場所が「ない」状態に陥ってしまう、ということを意味しており、さまざまな子どもが居場所を安定的に確保している、とは言い難い。

「こどもの居場所づくりに関する指針」で、こどもの居場所の特徴は「個人的で、変化しやすい」もので、「昨日まで居場所だと感じる場や対象が、心理的な変化や人間関係の変化などにより、今日は居場所だと感じられないこともある」との指摘があることも踏まえると、こどもの居場所は、1カ所より2カ所、2カ所より3カ所、といったように、今以上にひとつでも多くの居場所につながっていく仕組みが重要である。

（３）安心できる理由の上位は「主体性」「身近さ」「人間関係」

過ごす場所ごとに、その場所が安心できる理由を尋ねたところ、平日・休日ともに同じ傾向となり、1位は「好きなものがある、又は、好きなことができる」（平日32.9%、休日33.7%）、2位は「身近にある／自力で行ける」（平日15.7%、休日13.9%）、3位は「親しい人がいて安心できる」（平日15.0%、休日12.9%）であった。

なお、「主体性」については、行動に関する類似の選択肢として「くつろげる環境がある」もあったが、平日9.2%、休日12.3%であり、比較的少数回答となったことから、「のんびり／ゆっくり」といった静かな過ごし方よりは、好きなことを積極的・主体的にできる環境が求められている可能性が高い。

全体的には、その場所に「行きたい」「行ってもいい」と判断するには、その場所に関し、「自分でできるか」「物理的に近いか」「どんな人がいるか」といった情報が優先的に提供され、受け取れることが必要である。

（４）居場所「ない」は、およそ12人に1人

平日・休日ともに「家で過ごす」者で、かつ、「家以外で過ごせる場所があったらいいと思う」と回答した子どもを、「居場所がない側」とみなした場合、子ども全体の8.6%で、年代別にみると、小学生12.0%、中学生5.0%、高校生8.2%であった。なお、家で過ごす者が家以外で過ごせる場所を求めている割合は、平日で45.7%、休日で43.4%であり、平日・休日いずれも、約半数の「欲しくない」者がいることに注意が必要である。

「居場所がない側」が希望する「その場所」は、平日は「ゲームセンター・カラオケ」13.6%、「図書館」12.7%、「カフェ・飲食店」12.2%の順、休日は「ショッピングモール」19.0%、「ゲームセンター・カラオケ」15.7%、「カフェ・飲食店」10.2%の順で、商業施設関係が目立った。

また、選んだ理由は、「好きなものがありそう、好きなことができそうだから」（平日47.7%、休日53.2%）、「くつろげる環境がありそうだから」（平日34.8%、休日30.6%）、「居たいだけ居られそうだから」（平日26.5%、休日30.6%）の順であった。

全体的には「好きなものがある、好きなことができる」ことが、居場所がある側・ない側どちらにも共通し、有効な視点といえる。

「居場所がない側」も、一つ目の居場所につながることが重要であり、まずは居場所の存在を知ることが不可欠である。その際の情報からは、（３）の「主体性」「身近さ」「人間関係」を認知でき

ることが必要である。

一方で、「居場所がない側」が希望する場所が、「部活動」「習い事」が上位を占めた「ある側」と異なる傾向を示したことや、「選んだ理由」に「居ただけ居られる」「くつろげる」が上位を占めたことは、家庭生活上の閉そく感や社会生活とのつながりの薄さを示している可能性があり、プッシュ型の支援を検討する場合は、さらなる調査を行い、効果的な施策を図る必要があることに注意が求められる。

2 保護者票について

(1) 子ども票との差

子どもと保護者との間の認識の差を明らかにする観点から、保護者票の質問項目は、子ども票と同様のものを設けた。

平日又は休日で子どもが「家で過ごす」場合に、わが子が「家以外で過ごせる場所を求めていると思う」保護者の割合と、子ども自身が「家以外で過ごせる場所があったらいいと思う」割合を比較したところ、保護者が平日 23.1%、休日 28.8%だったのに対し、子どもは平日 45.7%、休日 43.4%だった。保護者が認識している以上に、子ども自身は、家以外で過ごせる場所を求めている。

(2) 小学1年～3年生の傾向

その家庭に小学1～3年生の子どもがいる場合は、その子について回答してもらうこととした。

小学校1～3年生に関する回答数は45で、サンプルの少なさに留意する必要があるが、平日過ごす場所は「家」：「家以外」は20%：80%であり、家以外で過ごす場所の上位は「児童クラブ」、「習い事」「祖父母の家」だった。一方、休日過ごす場所は「家」：「家以外」は52.3%：47.7%であり、休日に「家以外」で過ごす場所は、「児童クラブ」「スポーツ少年団」「習い事」の順だった。「家」：「家以外」の割合が逆転し、平日・休日ともに過ごす場所が「家」：「家以外」の割合はほぼ同じであった子ども全体とは、異なる傾向を示した。

小学校低学年の場合、一人で留守番又は自身の意思で好きな場所に行くような過ごし方は難しいため、平日の場合、児童クラブ、祖父母の家などの「家以外の預かってくれる場所」が上位となり、一方、休日は保護者と過ごす「家」の割合が多くなったものと考えられる。

3 団体票について

こどもの居場所に関連する活動・団体等に対する調査では、「居場所側」に「子どもたちに提供している環境・状況」について回答を求めたところ、上位は「人のつながりを感じられる環境」48.4%、「好きなものがある・好きなことができる環境」32.3%で、子どもが「安心できる場所」の理由として挙げた要素（主体性、人間関係）とおおむね重なっている。

また、「今以上に、子どもたちが貴施設に行く又は貴団体の活動に参加するために、子どもたちに必要な要素」について、最も多かったのは「子どもの家族の理解・サポート」58.1%で、選択理由（自由記述）では、家族による費用面の負担や活動場所への送迎等の意見があった。他の回答のうち、「通う・参加するための費用」6.5%も、趣旨は「家族の理解・サポート」に近く、「居場所側」としては、家族の影響が大きいとの見方が強かった。

「今以上に、子どもたちが貴施設に行く又は貴団体の活動に参加するには、貴施設（団体）にとって必要な要素」に関しては、最も多かったのが「運営・管理するスタッフの充実」で54.8%だった。スタッフの充実については、人員の数と資質向上の両面からの意見がそれぞれあり、具体的には「（スタッフの）不足のため見守りが手薄になると危険」「こどもに接するための思いや知識が必要」「年代のレベルに応じた指導が必要」等の声があった。「居場所側」における人材の確保・育成は、既存の取組の安定性・継続性から重要であり、支援策について今後検討する余地がある。

4 施設の認知度について

鹿児島市の「こどもの居場所」となり得る施設・場所の利用状況等について、子ども及び保護者に尋ねたところ、「よく利用している」場所の上位は、子ども・保護者で一致しており、「かごしま健康の森公園」（子ども 43.5%、保護者 53.8%）、「鹿児島ふれあいスポーツランド」（子ども 37.4%、保護者 44.2%）、「科学館」（子ども 29.1%、保護者 37.7%）であった。これらの場所には親子で一緒に利用する（又はしたことがある）場合が多く、回答が一致したものと考えられる。

一方、「あまり知らない」については、どの施設・場所も保護者より子どもが高い傾向にはあるものの、場所によって子ども・保護者間の認知度に差がみられた。最も大きかったのは「サンエールかごしま」で、子ども 66.5%・保護者 23.3%であった。このほか、「勤労青少年ホーム」（子ども 85.0%、保護者 46.9%）、「かごしま文化工芸村」（子ども 80.5%、保護者 48.0%）、「旧島津氏玉里邸庭園」（子ども 71.2%、保護者 40.6%）等も大きな開きがあった。

「知らない」中で、施設・場所へ「行きたい」との意思を持つことはできないため、「こどもの居場所」として活かしていくには、子どもへの認知度向上が課題といえる。